熟年俳句誌

1 2014年 月号

かさね

黒羽集（二十五）

佐藤喜仙

秋空を大きく廻る観覧車

秋耕のひと鍬土の黒きかな

台風の木犀の香とともに去り

銘柄米の田と知つて稲雀

稲妻の走るは龍の昇るさま

カーテンと窓の間の冬の蠅

色かへぬ松の四・五本松蔭神社

車前草を兎の餌に摘みし日々

花カンナ鉄錠錆びし神輿庫

掲示紙の吹きはがされて野分晴

鯊釣やいねむりのでる潮どまり

海底にレアメタルとや文化の日

那須野集

主宰選

煮汁染む大根ホクホクもう一献　丸山酔宵子

陽向では背広片手に秋の昼

鰯雲茜に染まり空覆う

美晴るかす野山の錦湯の煙

秋時雨傘ささず行く縄のれん

夕陽さす棚田の畦の彼岸花　池内とほる

柿の実も取らで年越す古屋かな

蕎麦蒔いて刈らず鋤込む転作田

秋あかね頬に迫りてついと過ぎ

夕時雨家路を急ぐ古背広

秋寒しかもめ群れ来る地曳網　田中清秀

紅葉且つ散るや地蔵の赤帽子

ぶつぷつと椎の実踏むや下山道

紅葉は僅かなれども手酌酒

読み止めの詩集に挟む色葉かな

車窓より武蔵野の風草もみじ　森岡陽子

啄みて木の実こぼすも土鳩かな

杜の道団栗混じる砂利の音

秋夕焼静かな波に鳶の群

嵐去り濁った川の逆さ橋